

【 献血の状況について 】令和4年2月1日（火）保健福祉委員会

献血の状況について伺います。

昨年の12月ですが、札幌市西区の『北海道赤十字血液センター』を訪れる機会があり、その際に対応をいただいた職員の方から、以前から冬の期間においては、献血者が減少しがちであり、血液製剤を安定的に確保するために相当な苦勞をされているとのことでした。

手術やがんなどの治療に欠かせない、輸血用血液製剤は、医療が進歩した今日においても、人工的に作ることはできず、献血により安定的に血液を確保する必要があると伺ったところです。

手術や、白血病の治療での輸血など、怪我や病気の治療には多くの血液が必要になります。

しかしながら、近年、10代から30代の若い世代の献血者数が減少傾向にある中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、献血者の減少について報道もありますので、何点か伺います。

（一）献血の状況と新型コロナウイルス感染症による影響について

少子高齢化が進む我が国においては、輸血や血液製剤を必要とする人が増える一方、男性16歳、女性18歳から64歳の献血可能人口が減少し、将来にわた

り、安定的に血液を確保することが難しくなると推計されています。

そうした中、新型コロナウイルス感染症の感染拡大とともに、外出自粛などの影響から、移動採血車の受入企業からもキャンセルが相次ぎ、献血者が激減しているとお聞きしています。

つきましては、新型コロナウイルス感染症における影響を含め、献血の状況について伺うとともに、これまでの道の取組について伺います。

(答弁：医務薬務課長 山谷智彦)

- ・道内では、今年度上半期は、例年並みの献血者数を確保できたものの、緊急事態宣言に伴う外出自粛などの影響により、一時的に血液製剤の在庫のひっ迫が見られた。
- ・また、上半期においても、11月に手術件数増により、一部の血液型で在庫が大幅に減少、先月の記録的な大雪の際にも、移動献血車が稼働できなくなるなど、大変厳しい状況を迎え、道赤十字血液センターにおいて、道外から、必要な血液製剤を確保した。
- ・道は、道赤十字血液センターと連携し、日々の在庫状況等を把握、昨年5月には、道医師会や道経連など、北海道献血推進協議会の構成団体に対し、献血の協力を依頼、6月

には『献血は不要不急の外出や移動に当たらない』旨の知事メッセージをホームページ等活用して発信したほか、11月には、道庁での移動献血車の受入について、年3回に加えて、臨時で実施するなど、積極的に献血者の確保に取り組んできた。

(二) 今後の取組について

安定的に献血協力者を募ること、献血協力者の利便性向上に向け、血液センターでは、献血会場の密集を回避させるなど感染症対策を行いながら、Web予約や大型ショッピングセンターなどの商業施設の協力により、献血活動を行っていることも承知しております。

一つでも多くの命を救うためにも、献血の重要性のPRを含め道民への周知が重要と考えますが、道として今後どのように取組を行っていくのか、伺います。

(答弁：地域医療推進局長 岡本収司)

・道では、法律に基づき、毎年度、献血推進計画を策定し、市町村や血液センターなどと連携し普及啓発等に取り組んでおり、特に、若い世代の献血者数が減少傾向にあることを踏まえ、毎年1月からの2か月間、新成人を中心に、『はたち

の献血キャンペーン』を実施するとともに、道独自の取組として、2月から、若い方たちが献血を身近なものと習慣付くよう『ティーンズドナー献血推進キャンペーン』を展開。

今年度は、コンビニの協力を得て、レシートへの広告印字や店内放送により、献血への協力を呼びかけることも予定。

・道としては、様々な機会、手段を活用し、引き続き、日々の在庫状況を把握し、今後とも、市町村や道赤十字血液センター、道献血推進協議会の構成団体等と連携協力しながら、血液製剤の安定的な確保に取り組んでまいります。